

新たな学び場の 国際サービスラーニング — 韓国福祉施設のボランティア研修から —

朴 城 慧 Sunghye PARK
外国語学部韓国語学科助手

1. はじめに

2016年の春学期、学生から韓国語を使うボランティア活動をしたいと声をかけられた。この希望を告げた学生が「韓国語を使う」ことを強調した理由は、学生の専攻が「韓国語」であることを大きな理由としていた。

近年、国際化における海外ボランティアの募集や活動報告をしばしば目にする。しかしながら、単純参加型で英語使用圏が多い現状がある。大学生がよく参考にする海外ボランティアサイトを検索すると、韓国で募集するボランティアは通訳や子供の英語教育指導ボランティアが多い。韓国でボランティア活動をしたいと思っている



日本の大学生は、英語を学んで韓国に英語教育指導ボランティアに行くしかない。韓国語を専門とし、自分の力を生かした活動をしたいという学生には悲しい現状にあると言わざるを得ない。

国際化社会の中、韓国語を専門とする国際人材育成のためには、まず、韓国語の実力を持つ人材が主体的に活動できる場を作り出すことが第一の課題と認識される。そして、経験による異文化理解が必要になる。

このような課題認識から、「韓国語」を使う「ボランティア活動」に着目し、国際サービスラーニングの手法を用いて韓国での福祉施設ボランティア研修を計画し、実施した。

本研究では、韓国福祉施設ボランティア研修内容を基に、学び場の創出を目的とする国際サービスラーニング

を提案し、さらに異文化理解を考察する。

2 ● 学び場と国際サービスラーニング

外国語を学習している学生は、学習した内容を披露できる機会を待っている。積極的な学生は使用できる場や相手を常に求め、声をかけてくる。しかし、消極的な学生は自ら声をかけられないことが多く、相手から声をかけられると、うれしそうに笑顔で返事をする。

このように、「学び」はあくまでも「活用の場」を必要とする。外国語を学習している学生にとってその活用の場は、座学で身に付けた知識を活動で生かす場を求める。そこで、最近注目されている教育方法の一つである国際サービスラーニングを、学び場の創出として提案したい。

サービスラーニングは、語源からみるとサービス（奉仕活動）とラーニング（学習活動）、つまり奉仕学習活動を意味する。澤山（2016）は、「サービスの提供者（ボランティア）と受け手である人間や社会、環境の双方の変化を意図して、サービスの目標と学習目標を結びつける取り組みである。現地活動とその前後の研修を一連のプログラムとして、ボランティア自身の振り返りと新たな価値観や知識・スキルの獲得、そして社会課題を認識できるような工夫がなされている点に特色を見出すことができ、また地域への貢献や生涯にわたる地域との結びつきの強化を重視する」（p.13）と述べている。また、江頭（2016）は、サービスラーニングの特徴について、「単純にボランティア活動を行うだけではなく、教室における座学と体験中に教育機会を創出するための仕組みが施されていること」（p.147）と述べている。国際サービスラーニングは、学び場を「国際」におく、グローバル人材育成や異文化理解を深めるための新たなサービスラーニングと捉えてよい。

本学科では、韓国語はもちろん韓国の歴史・文化・社会に精通した人材の育成を方針として、「交換留学」「デュアル・ディグリー」及び「使える韓国語の学習」と「経験による文化理解」などのプログラムをすでに設

けている。「臨地研修」と「交換留学」は韓国現地に中心を置く活動であり、この経験を経た学生は非常に高い語学力を身につけることができる。

そこで、本学科で上級の語学力を持つ学生を対象とする教育プログラムの一つとして、国際サービスラーニングを実施した。国際サービスラーニングの概念から韓国福祉施設ボランティア研修をみると、「学習」と「ボランティア」のハードウェアから、社会貢献及び自己開発・異文化理解のソフトウェアまで適用していることがわかる。

次章では、国際サービスラーニングの概念を用いて学生の活動内容を報告する。

3 ● 韓国福祉施設ボランティア研修実施概要

国際サービスラーニングのパイロット事業として韓国語学科3・4年生を対象にした韓国福祉施設ボランティアを計画した（表1）。申請により4名の学生を選抜し、サービスラーニング手法を用いて事前教育・韓国福祉施設活動・振り返り・活動後研修の各プログラムを実施した。

3-1. 学生選抜と事前教育

学生は、交換留学の経験・韓国語能力を考慮して選抜した。事前教育は出発前と活動前に設置し、「海外研修内容と注意点」「ボランティア活動概念と活動意義」の内容で実施した。特に、韓国福祉の知識がない学生の研修の成果に配慮するため、活動を行う韓国福祉施設のパンフレットを用いて説明した。説明は、韓国語と日本語で行い、日韓の福祉専門用語に触れる機会を設けた。

3-2. 韓国福祉施設活動・振り返り

ボランティア活動は、韓国の社会福祉法人の傘下機関で行った。地域福祉施設のため、地域住民や子供・高齢者・障害者と触れ合う活動になった。ボランティア活動の内容は韓国福祉施設の各担当職員が準備し、理論研修（図1）をはじめ、施設職員及び担当者の判断の基で韓

表1 韓国福祉施設ボランティア研修（文化研修除く）

日時	内容	担当
7月末	ボランティア研修事前教育Ⅰ 内容：海外研修内容・注意点等	担当：朴城慧
8.28（日）	釜山金海空港到着 ボランティア研修教育Ⅱ 内容：ボランティア活動概念、活動意義等	担当・引率：朴城慧
8.29（月）	頭松総合社会福祉館 活動振り返り	担当：金ユンジョン部長
8.30（火）	頭松地域自活センター 活動振り返り	担当：姜ヘジン室長
8.31（水）	沙下区基礎フードバンク・フードマーケット 地域児童センター 活動振り返り	担当：金ユンジョン部長 担当：姜ウンア園長
9.1（木）	頭松老人福祉センター保育園	担当：崔スジンチーム長
9.2（金）	観喜老人療養院（老人ホーム）	担当：李ヘミ事務局長



図1 理論研修



図2 無料給食サービス



図3 食事介助



図4 振り返り

国語を使う参加研修(図2、3)を行った。最後に一日の振り返り(図4)で活動を終了した。

施設利用者に関わる活動や専門知識を必要とする活動は、韓国の施設担当者の判断のもとで見学もしくは専門職員の指導に従って活動を行った。実践活動としては、地域活動領域の「フードバンクの支援物受領と配布」、「無料給食及び独居老人へのお弁当・おかず配達」、「老人大学歌教室」と専門活動領域の「老人ホームイベント参加及び食事介助」を内容とした。

3-3. 活動報告会と報告書

帰国後、報告書を作成して活動内容の振り返りと成果を確認した。次章には報告書をもとに国際サービスの成果をまとめていく。

4 国際サービスラーニングの成果

4-1. 学習の活用現場

コミュニケーション能力の確認のため選抜基準に留学経験と語学資格を設置した。事前教育の段階では、韓国施設の説明を韓国語のパンフレットを用いて韓国語・日本語で説明をした。韓国福祉施設での活動中は、コミュニケーションをすべて韓国語で行った。理論研修と参加型研修の説明及び質疑は、学生本人が現地施設職員と直接コミュニケーションを取りながら行った。また、専門用語は、福祉を専門とする教員が通訳として介在することで日韓相方の専門用語の学習につなげた。

今まで学習してきた韓国語を活用しながら行うことによって、いままで韓国語を専門で学んできたが、韓国語を通じて、語学でない違う分野の知識を深めることで自分をもっと成長できると思った。

参加学生は、この韓国福祉施設ボランティアが自分の

専門を生かして活用ができる場と認知している。また、この研修を「主体的な学び場」としてさらには、異なる分野を学び、自己の成長にもつながる機会として新たに認識を深めている。

4-2. 国際地域への貢献

上級の韓国語能力を有する学生は、コミュニケーションにおける支障がないため、活動の幅がり、より積極的な参加による国際地域貢献につながった。

フードバンクとは、地域のパン屋などと提携をし、お店の基準では廃棄されるまだ食べられるパンを無償で提供してもらい、助けを必要とする住民の方々に配っていくというシステムである。私たちは、パンを回収する車に同行させてもらい実際にスタッフの一員としてパン回収の体験もさせてもらった。

4-3. 自己成長と異文化理解

国際化によって大学生の異文化経験が増加している。この現状について坂本他(1997)は、「異文化との接触の機会は確実に増えているが、自己改革をせまられるほどの異文化との接触は少なく、異文化との付き合いが進化しているとは言えない」(p.47)と述べている。また、寺西は、「異質な文化や人々との体験は、鏡に写し出される自己の姿を見るようなものであり、自己の文化特性を対象化し、写し出すことになる。その場合重要なことは、お互いの文化のちがいに優劣をつけることだけではなく、その違いを味わい、楽しむゆとりが必要となる。」(p.32)と述べている。以下の内容から、今回の研修の参加学生は韓国福祉施設ボランティア活動を通じて異文化理解や自己成長の経験をしていることがわかる。

老人福祉センターでは、実際に施設に通っている高齢者の方々とお話をし、ユンノリ(韓国の伝統遊び)をする機会があった。多少勉強はしていたが、初めは高齢者へどう接していいのかわからずおどおどとして

※学生の『研修報告書』より抜粋した。下線は筆者が附した。

しまっていた。しかし、その時、事前指導で見て学びなさいと言われたことを思い出した。職員の方を見ると口を大きく開けてははっきりとゆっくり話している。そして、会話の中からキャッチボールができる内容を瞬時に探して質問していた。自分も見よう見まねではあるがしっかり伝わるように実践をしてみると、ちゃんと伝わった証拠に利用者さんが笑顔で楽しそうに会話をしてくれた。…(中略)…韓国福祉については、想像よりもたくさんのことを学んでくることができたし、知識の幅が広がったことで自分自身が一回りも二回りも成長することができた…(中略)…この経験から、小さな協力がたくさんの方の食事や命をつないでいることを実感した。



図5 伝統遊び PG 参加

午後には、施設のレクイベントの一つである市場遊びを行なった。私たちはお店の店員のお手伝いをした。偽物のお金をもともと配られているため、そこから買いたいものを買うに行くというシステムだ。外に出ることのできない利用者さんは本当に楽しそうだった。売り買いを行うというよりは、欲しいものを与えて満足感を与えるというようなレクリエーションだった。外に出たいという欲を抑えるためにこのようなレクリエーションが行われていることは面白いことだと思っただけでなく達成感や考える力などの相乗効果も生まれる

のではないと思った。

印象に残った利用者さんは、流暢な日本語で私によく韓国まで来てくれたと話しかけてくれて、とても感動した。その方は、若い頃に京都の方に住んでいたと言っていたのだが、長い時間が経ってもいまだに流暢な日本語を話していることに驚きもした。そのあとにやったユニノリでは、静かだった利用者さんが別人かと思うくらいに生き生きしながら私たちにやり方を教えてくれた。みんな笑顔に遊んでいる姿を見て、昔の思い出がどれだけ重要なもので、幸せの力になっているのかを感じることができた。また、明るく元気に利用者さんと近い距離で接している職員さんを見て日本の高齢者施設とは違う点も発見することができた。

以上には学生自身の異文化理解が深化したことが端的に表れている。また、参加学生の多くは異文化理解で社会的偏見を変える機会を得て、互いの文化の違いを味わい楽しんでいる。

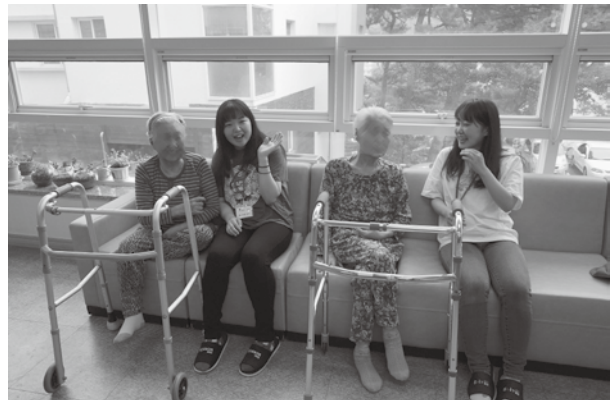


図6 老人ホーム：高齢者と楽しいお話

ボランティア前は、やはり日本に嫌な思いを抱えている方が多い世代なので嫌な思いをさせてしまったらと思ったが、そのような心配は全くいらぬほど、皆さん優しく受け入れてくれ、覚えている日本の歌や言葉話を話してくれた。

私は個人的に韓国の植民地の話や日本が嫌などと言われると勘違いしていた。想像以上、いや逆に親日の方が多く一緒に日本の歌を歌ったり、日本語で会話するなど楽しい時間を過ごすことができた。お話が終わる時には、ハグをしてくれ本当に娘のようだと喜んでくれたのがとても印象的で私の想像を変えてくれた機会となった。

私の知っている福祉のルールで、日本では、介護の資格がないと利用されている方に触ってはいけないというのがあり、触っても大丈夫なのかと戸惑った。しかし、韓国の場合、利用している方々は人と触れ合うことが好きなため触っても問題がないという。そこには大変驚いた。さらに、日本では施設で利用されている方々を名前で「〇〇さん」と呼ばなければいけない。しかし、韓国では親しみを込めて「〇〇할머니(おばちゃん)、〇〇할아버지(おじちゃん)」と呼ぶそうだ。文化の違いが福祉を通じてみることができ、不思議であったが大変興味深いものだと感じた。

日本と韓国の違いとして、利用者と職員の距離感を感じた。日本では利用者に触れないようにする介護が良いとされているという話を聞いたが、韓国では手を握り、腕をさすってあげている場面に出会うことが多かった。個人的な意見としては、人の温かみを感じる介護方法が日本でも実施されればよいと感じた。やはり感情的なさみしさを感じることによって情緒にも影響が出ると思うからだ。

5. まとめ

韓国福祉施設ボランティア研修を通じて、参加学生は自分の専門である韓国語を活用し、国際社会に参加することから、自分の成長や異文化の理解を深めていることが分かった。

また、「今回のボランティア研修を通じて、韓国の福祉を知ることができた一方で、自国の福祉をもっと知り

たいと強く感じる機会となった。」という内容から、新たな学習の機会になったことがわかる。

すなわち、国際サービスラーニングは「学習」を生かし「活用」し、さらに「新たな学習」をもたらす好循環の教育効果を生む。特に、韓国語を専門としている学生が現地で行う国際サービスラーニングは、高度のコミュニケーション能力を求められることから、韓国語上級の3・4年に新たな学び場として学習機会を提供できると考えられる。

引用文献

- 江頭 満正 (2016), 「国際サービスラーニングの教育効果：カンボジア孤児院支援を事例に」, 『尚美学園大学総合政策論集』 22, 145-166
- 坂本 真理子・富田 輝司 (1997), 「異文化との接触到に基盤をおいた体験学習の効果：国際協力学習プログラムの経験から」, 『愛知県立看護大学紀要』 3, 47-53
- 水越敏行・田中博之 (1995), 「新しい国際理解教育を創造する：子どもがひらく異文化コミュニケーション」, 『ミネルヴァ書房』 pp.32
- 澤山 利広 (2016), 「国際協力サービスラーニングによるグローバル人材の育成と多文化共生社会づくり」, 『天理大学地域文化研究センター紀要』 13, 13-17

参考文献

- 山田 直子 (2016) 「多文化サービス・ラーニング導入に関する予備的考察：佐賀市三瀬村との連携・協働事例をもとに」, 『佐賀大学全学教育機構紀要』 4, 137-152
- 川口 恭子 (2000), 「異文化理解と異文化経験：バン格拉デシュスタディーツアーの経験を通して」, 『看護学統合研究』, 2 (1), 1-10
- 泉水 清志・小池 庸生 (2012), 「異文化接触が異文化受容態度と友人関係に及ぼす影響」, 『育英短期大学研究紀要』 (29), 25-41
- 溝上 由紀・柴田 昇 (2009), 「「異文化理解」と外国語教育一教養教育の一形態として」, 『愛知江南短期大学紀要』 (38), 31-42